



～ 夢ひとすじに ～  
宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 27 年度 第 14 号  
平成 28 年 3 月 25 日 (金) 発行  
さいたま市立宮原中学校  
メールアドレス  
miyahara-j@saitama-city.ed.jp  
ホームページアドレス  
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「それは・・・誰ですか」

校長 山 下 誠 二



15日に挙行されました第69回卒業証書授与式には、多くのご来賓、保護者の出席のもと、厳かに宮原劇場が展開されました。(宮原中では、卒業式のことを「宮原劇場」と呼んでいます。)

式辞では、一人ひとりの卒業証書を、顔を思い浮かべながら書かせていただいたことを話させていただきました。この証書は、中学校を卒業したという証しで、世界で一つだけのあなただけの卒業証書。誕生日が書かれているのは、当然のことながら、あなたが生まれた日。その日はどんな日だったのか。天気はどうだったのか。寒かったのか。暖かだったのか。どんな日であっても、家族や親せきの人たちは、あなたが生まれたことをどれほど喜んでくれたことか。今日まで、どれほどの方に、どれほどのことをしてもらってきたのか。夜泣きをして寝付かないとき、ずっと寝ずにあやしてくれたのは誰ですか？ 朝、なかなか起きられない時、大きな声で起こしてくれたのは誰ですか？ 入学式の時、みんなと同じようにと制服や通学バックを用意してくれたのは誰ですか？ 風邪やインフルエンザで熱が出た時、心配して看病してくれたのは誰ですか？ 忘れ物をしたとき、そっと学校へ届けてくれたのは誰ですか？ 部活動の大会や休日練習の日、お弁当を作ってくれたのは誰ですか？ あなたの命が生まれた日から、たくさんの方々があなたを見守ってくれました。あなたは、どれほどのことをしてもらったのでしょうか。そして、どれだけのことを返すことができたのでしょうか。あなたにとって、一番大切な人は、いちばん身近にいます。という内容の話をしました。また、来賓の皆様からは「呼名の返事」と「歌」が大変すばらしかったとのお褒めの言葉も多く聞かれました。来年は、2年生の番です。宮原中の伝統をつないで守る卒業式も大切ですが、さらに攻めていく卒業式を期待しています。

さて、3月17日のY新聞の編集手帳には、次のことが書かれていました。

その人の遺書を見たことがある。(まち子 子供よろしく 大阪みのお 谷口正勝)。当時40歳の谷口さんも乗っていた。1985年8月12日、群馬・御巢鷹の尾根に墜落したジャンボ旅客機である。備え付けの紙袋に書かれた遺書は日本航空の安全啓発センターに展示されている。画数の多い漢字を避けた仮名書きと乱れた筆跡に、命の残り時間に追われる人の息遣いが聞き取れる。「二人の息子に食べさせたい」と正勝さんは、自宅の庭に柿の木を植えていた。事故の2か月後、初めて実をつけたという。妻の真知子さんが都内の小学校に招かれ、1年生の児童に命の大切さについて語ったと都民版が報じていた。「みんなも家族に怒られると『うるさい』って思うよね。でも、そういう何げない日常が、どんなにありがたくて特別か、考えてみてほしいの」。柿の木の話も交えた語り児童は一心に聴き入っていたという。30年が過ぎた。あの惨事を知らない幼い子供たちの胸にも届いたに違いない。亡き人が、丹精したいのちの赤い実である。

坂本九さんの長女、歌手の大島花子さんはこう言います。「今、生きていることが、どれだけ輝いていることなのか。それを伝えるために歌っているんです」と……。命の尊さは、誰もがわかっていることです。辛いことがあっても、明日に向かって一歩を踏み出す。前に進めなかったら止まってもいいと思います。だから「正」という字は一つ止まると書いて正なんです。来年度もよろしく願いいたします。

